

第III編 九州における有機農業の展開

——先覚者の思想と有機農業の実践——

江 口 傳（経営学部）

目 次

第1章 序説

第1節 経済の高度成長と資源エネルギー，環境問題

第2節 減農薬 減化学合成肥料から有機農業へ

第2章 健康食と有機農業の連結に関する思想系譜

—石塚左玄・桜沢如一・久司道夫・等の思想—

第1節 石塚左玄の思想

第2節 桜沢如一の思想

第3節 久司道夫の思想

第3章 安藤孫衛の思想と活動

第1節 安藤の思想形成過程と基本的内容

1 安藤の生い立ち

2 健康の理論的研究と歴史的事実的研究

3 最近の医学農学理論の吸収

4 食物連鎖の重視

5 意思決定と責任

6 自然への感謝

第2節 健康長寿と自然環境諸条件および市場経

済との関連についての研究の拡大の必要

第3節 安藤の活動—今後の課題

第4節 梁瀬義亮・竹熊宣孝の思想

第4章 むすび

注

文献

あとがき

第1章 序説

第1節 経済の高度成長と資源エネルギー，環境問題

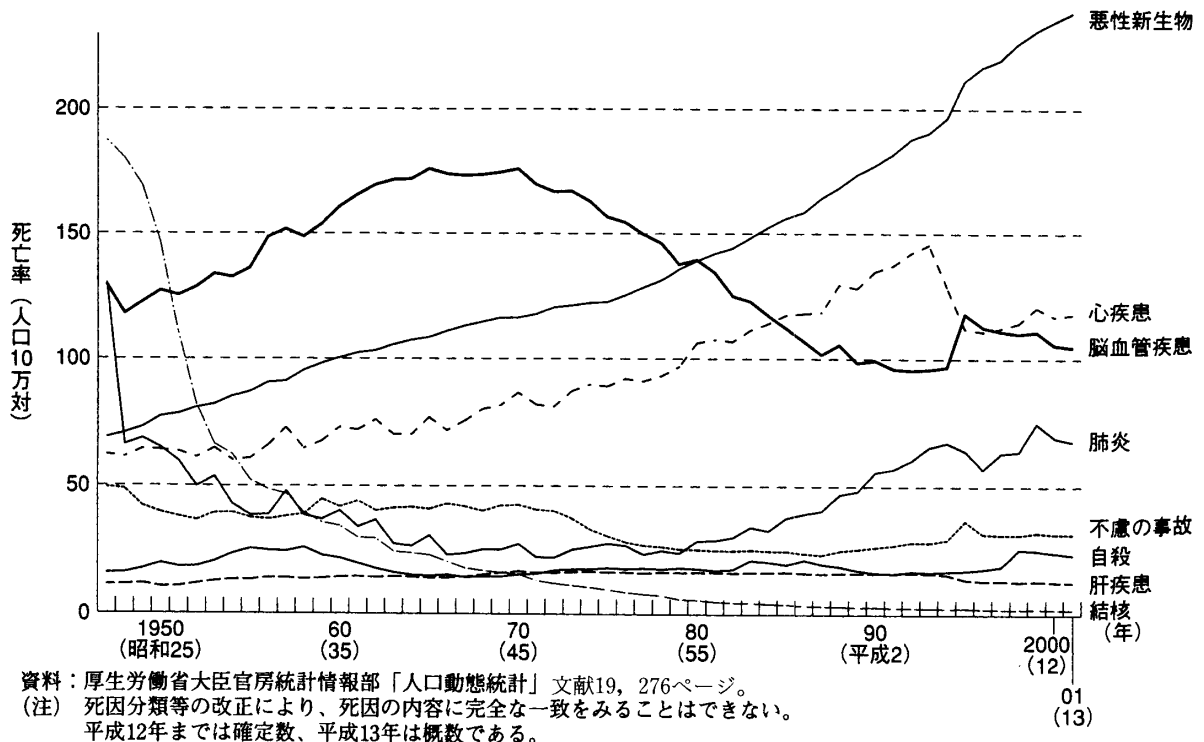
1955年頃からの経済の高度成長は，産業構造の高度化を促進し，第一次産業就業者の第二次産業や第三次産業への流出，専業農家の減少，兼業農家の比重の増大，農業の機械化や農薬 化学合成肥料の使用の増加をもたらした。製鉄業での銑鋼一貫臨海製鉄所の増加，

自動車組立大規模工場の増加，大規模造船所の増加，重電機器製造工場や軽電機器工場の増加，コンピュータ製造業の急成長，化学工場の増加，新幹線網や高速道路の拡大等をもたらした。アメリカのドル危機や1973年の石油ショック等によって経済の高度成長はブレーキをかけられたが，資源問題や環境問題が深刻化していった。家庭の化学合成洗剤の汚水の河川への流入，工場の汚水の河川への廃棄，工場の炭酸ガスや硫黄酸化物や窒素酸化物等の大気中への排出，ゴミ処理や尿尿処理問題，自動車の排気ガス問題，フロンガスによるオゾン層破壊問題，過度の化学合成農薬や除草剤の使用による発癌性や催奇性物質の農産物や土壌や河川への残留問題，食品の保存料や着色剤や香料等の人体への影響問題等が続出した。自然の生態系は急速に攪乱されて，山林の伐採による山地の保水能力の低下からくる洪水や渇水の頻発，炭酸ガスを吸収して酸素を供給する植物や微生物の減少からくる空気浄化力の弱化 炭酸ガスの増加，山林の減少による地表温度維持能力の弱化，工場排水や家庭雑排水の河川への流入によるメダカ・タニシ・ドジョウ・鯰・トンボ・蛍・蛙・水中微生物の減少や水質汚濁や悪臭，農薬・除草剤の散布や堆厩肥の減少からくるミミズ・ダニ・蝶蜘蛛・蚊・モグラ・土壌微生物の減少・土壌ミネラルの不均衡・土質の劣化・地下水低下・砂漠化，食品防腐剤・着色剤・香料・艶だし剤等による人体の発癌性・催奇形性を強める。地上の弱小生物の奇形化・減少・消滅をもたらした化学合成物質は河川を汚染し，河川の流入する海洋を汚染し，海洋中の魚類や海草類に汚染物が吸収され，

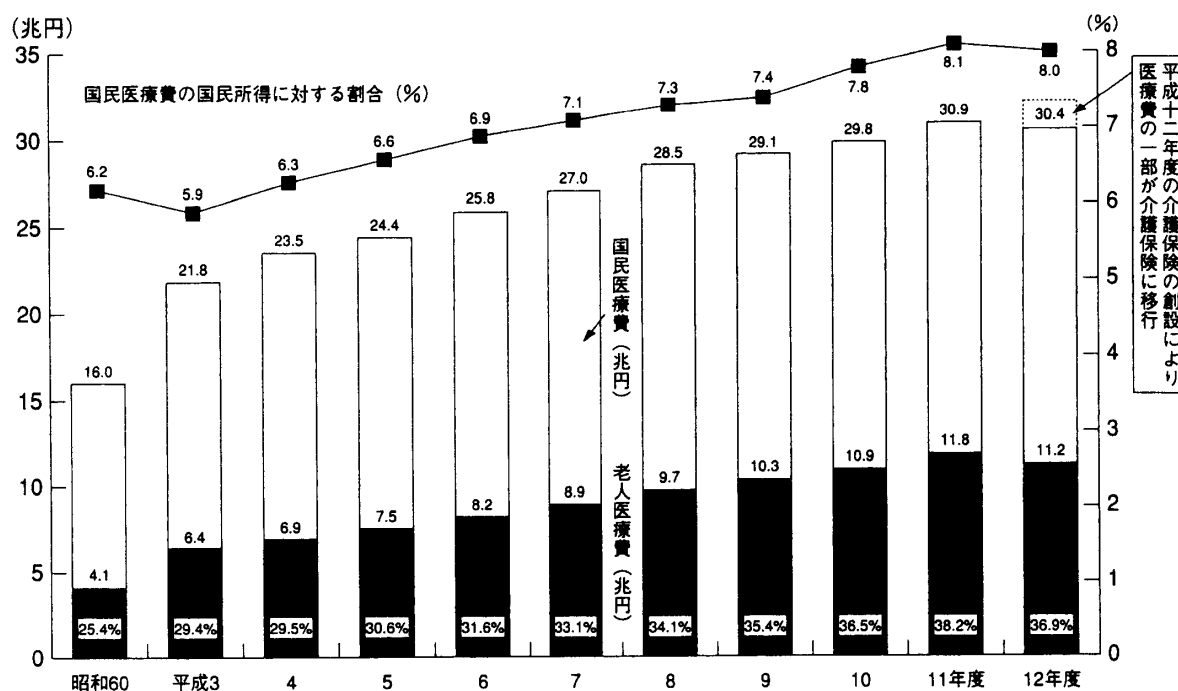
食物連鎖等による因果の巡りによって食物連鎖の頂点にいる人間の弱体化、奇形化、生活習慣病、発癌・遺伝子の突然変異等の結果になっていくであろう。食物の劣化や白砂糖入り食物の多食習慣、人工化学甘味剤入り食物の多食習慣、過剰な食塩の摂取習慣、過剰飲酒習慣やたばこの不適切な喫煙習慣、体を動かさず歩行不足の習慣、休養不足習慣、体や心にこたえるストレス等、による生活習慣病（生活習慣の偏りからくる病気、糖尿病、肥満、高脂血症、高尿酸血症、循環器病、高血圧症、大腸癌、肺癌、アルコール性肝疾患、歯周病等）を激増させる。食物の劣化、白砂糖入りや人工甘味剤入り食物飲料の多食多飲は短時間に血糖値を上げ、血糖値を下げるインシュリンの分泌増加を必要ならしめ、インシュリンの急増は低血糖をもたらす。今度は血糖値を上げるため副腎からアドレナリンが分泌される。このようなことの循環でアドレナリンの増加が精神の不安定、忍耐力の欠乏をもたらす。発ガン性物質や催奇形性物質の自然分解には時間がかかる。人体には免疫力

（異質物に対する拒絶反応も、異物に対する解毒 分解 排泄機能も）備わっていて、それらの機能をもつ酵素やホルモンも備わっている。だが、次から次へと急速な新しい化学合成物質の出現 増加には遺伝子も対応が遅れ、胃腸も肝臓も腎臓も脾臓も脳も疲労している人が多くなる。2002年12月1日の新聞報道（朝日）によれば、水産庁の海域別調査で魚介類のダイオキシン類濃度が濃くなり、国の定めた安全基準を大きく上回る魚種もあった。数値は魚1グラムあたりの含有量で、単位はピコグラム。（1兆分の1グラム）。米国沖大西洋、クロマグロ10.1。大阪湾、天然・コノシロ9.1。海洋の魚類にも汚染が蓄積されつつあることがわかる。生活習慣病や公害病等の増加（図表1参照）は、医療費の激増をもたらしている。医療費の激増は、国民医療費負担の激増や国家財政の負担増となり（図表2参照）、増税の必要とならざるを得ない。

これらの問題の軽減や事前防止等の対策が政府、企業、家庭、先進的農協、生協、その



図表1 主要死因別にみた死亡率（人口10万対）の年次推移



文献19, 408ページ。

図表2 国民医療費の推移

他の民間団体で調査研究，実施されていった。

第2節 減農薬，減化学合成肥料から有機農業へ

環境劣化の深刻化，死亡要因別死亡率で悪性新生物が1980年にトップとなり，生活習慣病が激増すると（図表1参照），国民医療費が激増していき（図表2参照），健康の最大要因である食物が注目されるようになっていった。

有機農業から減農薬減化学合成肥料を経て慣行農業に至るまで，環境保全型農業には多段階があり，農産物の品質の表示が取引市場で混乱し，信用されなくなっていた。農産物の品質の基準を決め，農産物に表示するため，有機農産物認証の基準と認証法人の基準と認証方法 技術を，農林省が定めた。

有機農業と減農薬減化学合成農業とは，同時並行的に多数存在している。有機農業をあちこち散在的に独立して熱心にやっている農家に合鴨農法の古野隆雄，堆肥厩肥の八尋幸隆 等多数あり，農協では減農薬も含めて

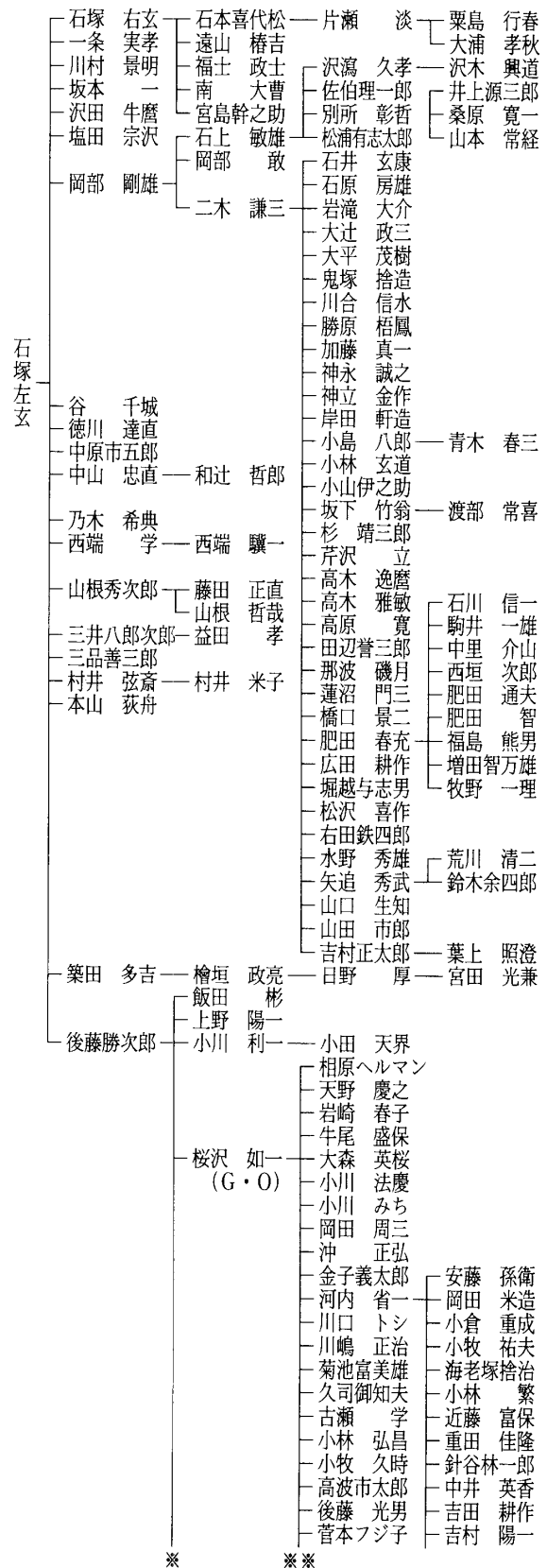
大分の下郷農協，宮崎県の綾町農協，熊本県の佐伊津農協，熊本清和農協，福岡県の福岡市農協等があり，熊本には沖縄を除く九州全県を対象とする有機認定業務法人である熊本県有機農業研究会があり，福岡には有機農業の啓蒙普及活動をしている福岡県有機農業研究会がある。有機認定業務法人には，熊本県有機農業研究会以外に，九州では福岡のオーガニック認定機構，オーガニック アグロセラピーソサエティ，佐賀の有機食品認証普及協会，長崎の長崎県食品衛生協会，熊本のオーガニック認証協会，大分のおおいた有機農業研究会，トータルクオリティ・サーティフィケーション・サービス・インターナショナル，宮崎の綾町，鹿児島県の鹿児島県有機農業協会，沖縄のオーガニック・テクニカル協会等がある。認証に当たっては，認証手続き書類の煩瑣さや認証費の標準化等の問題があるようである。認証にあたっては膨大な書類が必要であり，認証検査も煩雑で，費用もかかるし，消費者の健康に密接に関係してくる手続きであるから，認証関係書類は標準

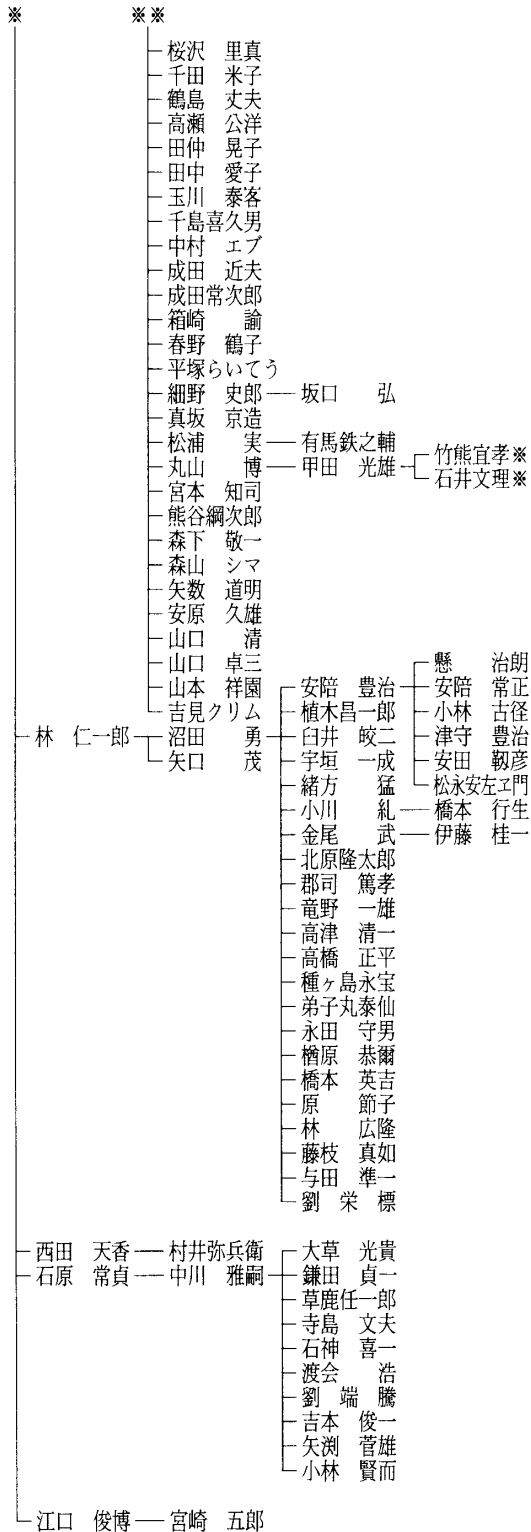
化して、書類費用は関係省庁の助成が望ましいと思われる。有機農産物とは、3年間無農薬、無化学肥料の農場で栽培した作物である。長年月続いている伝統的な農法で生産され、環境を維持するように生産された農産物である。生産者は、認定機関に書類で申請し、審査を受ける。農産物の生産過程の時期、場所、生産者、原料、機械器具、装置、生産施設、輸送、選別、調整、洗浄、貯蔵、肥料、害虫に対する天敵の利用等による有害動植物の防除、作物の数量、包装、出荷、流通過程等について書類審査と現地審査を受ける。審査は、年一回行われ、費用は申請者が負担する。なほ、農薬や化学肥料を使用しない期間が6か月以上3年未満の土壌で生産された農産物は、転換期間中有機農産物と称される。さらに、減農薬、減化学肥料で、厩肥堆肥を用いる農家は、地方自治体に申請してエコファーマーとして認定され、助成を受けることができる。有機農産物に近い物として、無農薬栽培農産物、無化学肥料栽培農産物、減農薬栽培農産物、減化学肥料栽培農産物等がある。これらを、地方自治体や農協が独自に認定していたこともあった。ここでは有機農業、減農薬、減除草剤、減化学合成肥料、河川浄化の思想や事前対策（フィードフォワード）の動きを主として調査研究し、特にその先覚者達の思想や活動を歴史的に研究してみたい。各地の有機農業の認証経過や有機農業の実践については、次号以下で調査研究の発表の機会を持ちたい。

第2章 健康食と有機農業の連結に関する思想系譜—石塚左玄、桜沢如一、久司道夫等の思想—

図表3で石塚左玄に連なる系譜を示すが、思想的影響の強さは人によって異なる。さらに、これらの人々の系譜の線を変更し、複数にすることも可能であろう。この中から特に石塚左玄、桜沢如一、久司道夫、安藤孫衛を

図表3 食養の系譜





文献5, 表紙 裏面
 (この系譜は郡司篤孝, 沼田勇, 橋本政憲らの調べによる)
 ※の2人は江口による追加。

取り上げて、福岡県有機農業研究会会長で自然食の会会長でもある安藤の思想と活動をクローズアップしていきたい。

第1節 石塚左玄 (1850-1909) の思想

石塚は図表4で示しているように、明治以前に生まれ、医学を勉強して軍医となり、後に開業医となった。古今東西の医学を研究し、化学的食養長寿論¹⁾および、食物養生法(化学的食養体心論)²⁾を著わした。軍医退官後に自宅を石塚食療所とし、病に悩む者の相談に応じ、門前市をなす盛況であったという³⁾。

石塚の食養論の基軸は、次のように要約することができるであろう。

- (1) 人は穀食動物である⁴⁾。
- (2) 玄米を搗白すると、表層の貴重な成分が除去されるので、精白米は貴重な栄養素がかけている⁵⁾。したがって、それらを副食で補う必要がある。
- (3) 蛋白, 脂肪, 澱粉は顕在的栄養素であり, ミネラルは潜在的栄養素である。

ミネラルの中でもカリウムとナトリウムが重要で、石塚は夫婦カリ塩ナトロン塩と呼んでいる⁶⁾。この両者の中で、カリウムが主導者の大任を有する隊長の如く、これに随従するナトリウムは、カリウムの責任を補佐する副官のように最も少数で、蛋白脂肪は下士官であって多数あり、澱粉は兵卒であって最多数である。これ等のものはそれぞれの役割を果たしながら、協同一致して食の食たる役割を果たし人体を無病健康に保養する⁷⁾。カリウムは、酸化作用の主導者で、空気より酸素を吸収せしめ、ナトリウムは酸化作用の鎮抑者である。穀菜果実のような食物でカリウムを身体に取り入れると、血液は十分に酸化して新陳代謝の機能を盛んにする。魚鳥獣肉卵及び塩味品のような食物から取り入れるナトリウムは、血液の酸化作用を抑制し新陳代謝機能を劣化させる。カリウムは吸水作用を営み、ナトリウムは脱水作用を営む。食物の中に含まれるカリウムとナトリウムの割合が、食物の性質を規定する。

- (4) 副食として、山の産物(山の幸)と海

の産物（海の幸）とは、別々に料理し食べるのではなく、合わせて料理し食べるが良い⁸⁾。

(5) 食物は伝統的な粗食で、少食が良い⁹⁾。

石塚の食養論の基軸の(1)におかれている、人は穀食動物であるという判断は、人間の歯の形態別機能と形態別数から来ている。奥にある臼歯は臼のような形態をし、上下の歯が噛み合い、左右にも動いて、穀物を噛み砕く機能を果たし、上下に10本ずつ合計20本ある。犬歯は、臼歯の前にあって先端鋭く、硬い骨肉を噛み砕く機能に適している。上下に2本ずつ合計4本ある。切歯は、口の前面に上下4本ずつ合計8本あって、草類を噛みこなす機能に適している。このようにして、大人の歯は、全てが揃っていると、合計で、32本ある。臼歯20本は、32で割ると0.62となり、62パーセントとなる。犬歯4本は、32で割ると0.12となり、12パーセント弱となる。切歯、8本は、32で割ると0.25となり25パーセントとなる¹⁰⁾。このようにみえてくると、人は歯と

顎の形と機能から穀食を主とし、野菜類を25パーセント、動物類を12パーセントの副食として数十万年か数百万年生きてきたのであろう¹¹⁾。石塚説の(2)に置かれている意見では、米や麦の搗精は、多種類の栄養素に恵まれ、内実部分と渾然一体となって調和した栄養物となっている表層部分を除去することになるから、望ましくないという判断である。これは、野菜果物にも妥当し、一物全体を食べたが良いという判断である。石塚説の(3)に置かれている意見は、そのメカニズムが難解である。客観的メカニズムというよりも、石塚の主観的願望を述べているように思われる。石塚は、大著化学的食養長寿論では、カリウムを陽、ナトリウムを陰としている¹²⁾。石塚説の(4)に置かれている意見は、海の幸と山の幸のように性質の似ていない、むしろ性質の対照的材料を料理して食べたが良いという判断である。そして海少陸多の地、寒地、高地、大陸の大気中にはカリ塩が多く、カリウムを多く含む穀物や野菜が多いから、ナトロン塩

図表4 石塚 左弦 年譜

1850	出生	越前福井子安町
1868	明治維新, 18歳	福井藩医学校御雇となる
1869	19歳	元福井藩助句読師となる
1870	20歳	元福井藩病院調合方申しつけらる
1872	22歳	東京大学南校化学局御雇申しつけらる
1874	24歳	陸軍軍医試補申しつけらる
1875	25歳	陸軍本病院第三課出仕申しつけらる
1876	26歳	第五軍管徴兵使随員申しつけらる。長女文枝生る
1880	30歳	従7位に叙せらる
1882	32歳	次女本枝生まる
1885	35歳	長男右玄出生
1886	36歳	夫人死去
1888	38歳	福井藩士族伊藤輔の長女督を夫人に迎う
1891	41歳	従6位に叙せらる
1894	44歳	日清戦争起こる
1895	45歳	清国で軍医として勤務
1896	46歳	化学的食養長寿論発行, 純正日本食養古道復興普及を始める
1898	48歳	通俗食物養生法発行
1907	57歳	食養会 起り 食養雑誌 創刊
1909	59歳	死去

参考文献23, 16ページより要約。

を多く含む魚介類を食べて陰陽バランスをとり、海多陸少の地の大気中にはナトロン塩が多く、ナトロン塩を多く含む魚介類が多いから、カリウムを多く含む穀物野菜果物類を多く食べて陰陽バランスをとるべきである、ということになる。石塚説の(5)は、伝統的に料理され、食べられてきた食物は、美味で材料が豊富で経済的で、体が求めるもので安全であったという判断であった。

石塚は、小食であれば身いよいよ健やかなり、身健やかなれば体いよいよ軽く、体軽ければ心いよいよ爽やかに、心爽やかなれば知恵いよいよ明らかなにして、知恵明らかなれば才いよいよ巧みなり、といている。食多ければ上と逆になる¹³⁾。

石塚はカリウムは夫で食塩の勢力を適度に掣肘するもので陽性力であり、ナトリウムは陰勢力であり、これ等のミネラルは、蛋白・脂肪・澱粉に比べると陰であると、化学的食養長寿論ではいっている。石塚には陰陽の判断基準に曖昧なところがある。というよりも、陰陽の定義が桜沢以後逆転したから迷うであろう。石塚は、農業については主著では殆ど触れていない。

第2節 桜沢如一(1893-1966)の思想

桜沢は貧乏士族の長男として生まれ、京都第一商業学校を卒業すると貿易業に就業した。青年時代に結核となり、石塚の著書で石塚式食養法を知り、食養を実践して健康を回復していった¹⁴⁾。

食養会で活動したり、パリーで勉強したりしながら、教養や食養体験を深め、老子、易、哲学、宗教、医学、生物学、化学、物理学の知識を吸収して石塚理論を越えて、食養の理論と技術を大成していった¹⁵⁾。石塚のように、ナトリウムとカリウムだけで事象の陰陽を理解し判断するのではなく、色、動きの速さ、重量、拡大縮小、電磁波の波動、温度、等の多数の基準で判断した¹⁶⁾。だが陰陽は極めて抽象的次元の事象を示す言葉であって、陰陽が

無限に混合・交錯・浸透していく現象界になればなるほど、複雑な要因を考慮にいられて、陰陽を理解し判断する必要がある。だから当事者の都合や便宜にしたがって、勝手に理解判断の基準や要因を選べば陰陽の理解判断が独断的となり、歪む可能性がある。桜沢の陰陽の理解判断の要因や基準が多いから、どの要因基準に重みをおくかによって、総合的な理解判断が異なってくる。極端に言えば好みの違いになる可能性がある。安藤が食物や人の陰陽を殆ど口にしなくなったのも、このような事情もあると思われる。

ここでは、桜沢の根本的思想である無双原理 易 —実用弁証法—について触れる余裕はない。桜沢は、人の健康のためには、生命力の溢れる食物が必要であり、健全な食物は有機農業によって栽培される。有機農業には清澄な空気と太陽の光ときれいな水と完熟の堆肥厩肥が必要とみていた。伝統的な自然環境を尊重し、汚染することを罪悪視した。有機農業の実践には、殆ど従事していない。

桜沢も搗白しない穀物を主食とし、野菜海藻小魚を副食とし、朝食には野菜海藻の入った味噌汁を食べ、良く噛んで食べ、自然に感謝しながら食べるよう訓えている。

大森英桜は、石塚左玄が59歳で死に、その子右玄は30代で死に、桜沢の弟子達も不幸になっていく人が少なくなかった、それは桜沢の晩年まで理論に不備があったからだといっている。長寿でないのは、理論の不備、技術の不備、疲労、運動不足、姿勢不良、ストレス、病弱な遺伝的傾向等が考えられる。理論の不備、技術の不備、ストレス等は克服されていく必要がある。桜沢も穀食中心、玄米主食、野菜小魚等の副食をよく噛むこと、自然に感謝すること等を石塚理論から継受している。桜沢が石塚と基本的に異なるところは、石塚が食物のナトロン塩カリウムを基準にして健康を見たのに対し、桜沢は宇宙の森羅万象を陰陽の展開とみ、食物を陰陽から理解判断し、食物を陰陽調和するように摂取すれば健

康で幸福になると判断し、諸々の意思決定をする点である。食物の陰陽調和の基準を、玄米にしている。桜沢の理論を理解し受容するか否かは、陰陽の理解にかかっている。

第3節 久司道夫（1926～）の思想

久司は桜沢の事業の後継者としてアメリカのボストンで活躍している。久司も人の生存や健康にとって、食物が最も重要であることを認め、食事の材料、料理、食べ方の研究指導に専念し、有機農産物を食べるよう指導し、有機農産物を配送し、販売し、食堂も経営し、マクロバイオチックの英文著書やその日本語訳を多数出版し、定期刊行物 East West Journal を1970年から発行し、発行部数は85年に8万部に達している。これによって、アメリカの最新の医学、栄養学、マクロバイオチック等に関する情報を、世界に発信している。農産物の栽培についても、有機栽培を指導しているようである。久司の主要著書の中には、Natural Agriculture and the Cause and Cure of Diseases もある。

桜沢が独学で思想を形成し、フランス中心に世界を見、時流に関する情報収集に遅れた感があるのに対し、久司は東京大学法学部出身でどちらかというアメリカ中心に世界を見、政治や学界の中枢から情報をもらい、情報交換している。時流の先端を進んでいるように見える。このように考えるのは、参考文献31)の島蘭の{食}に関する文章に接したからである¹⁷⁾。

久司は事象を絶えず変化するものとして、動態的、歴史的、発生史的に見る見方を貫いている。久司のマクロバイオチック健康法を見ると、基本的には桜沢の説に従いながらも桜沢説を越えて進んでいるとみられる。

第3章 安藤孫衛（1918～）の思想と活動

第1節 安藤の思想形成過程と基本的内容

(1) 安藤の生い立ち

安藤の思想の根底に若年時に病弱であったことと、それを克服するために食養法を研究したこと、および近代医学を学んで医師になっていることがある。おそらく食養法を研究する過程で、従来の学説を更に深く究明したいという願望を強めたと推測される。同時に慢性病をもてあましている西洋医学への危惧の念もあった。

安藤は、新潟県で生まれ、福岡市で育っている。胎児期から乳幼児期にかけて白砂糖の栄養を与えられすぎて、さらに卵牛乳を中心とした動物性食も過食となり、病弱であった。福岡の名門校 修猷館を病気のため旧制中学1年で中途退学し、自宅で療養生活をしてきた。今までのような食事が自分の身体に適合していないのではないかと疑問を持ち、健康になりたくて、健康に関する本を読み漁り、やがて食物の重要性に気づいていった。図表3に記載されている人々の著書が、主なものであったろうと思われる。

食物を変えて、白砂糖の入った菓子類を食べず、伝統的な日本食にしていくと健康が次第に回復してきた。その頃の安藤の食養は、極めて厳格なものであったろうと推察される。文部省の専門学校入学試験に独学で合格し、次いで九州高等医専（現在、久留米大学医学部）に合格、いよいよ医師の道を歩み始め、長い苦難の時代を乗り越えて運勢が上向いていく¹⁸⁾。

医院開業と同時に、1952年に食養健康むすびの会を作り、自宅の広間や神社やお寺で講演会を開催し始めた。この会は、その後「福岡県自然食普及会」「食品公害から生命を守る会＝自然の会」と改称し、現在は 自然食の会と称している。これと並行して、家庭や工場の汚水が流れ込まない山の中腹の森林地

帯に、土地を探し、購入し、自身で有機農業を始めた。その土地で取れたものは、穀物以外は持ち去らないでその土地に返し、海藻類を混ぜた堆肥を肥料にして土地に戻し、収穫は増加していった。その資金調達のため開業医に不可欠とされている電話まで売らざるをえなかった。ここが、一般の食養指導者より優れているところである。意識的な有機農業の開始である¹⁹⁾。

(2) 健康の理論的な研究と歴史的事実的研究

抽象的な理論的な研究だけでなく歴史的事実的研究が必要と考えた。健康長寿で幸福な生活を実現するためには、健康長寿を実現している社会や家族を発見し、どのような生活をしているか観察して主要な特徴や条件を発見し、それを活用することである。

健康長寿の社会は、フンザや山梨県ゆずり原村であった。これらの社会では、その気候風土にあった植物を自然完熟堆肥厩肥で育て、穀物を主食とし、野菜果物や魚や卵等を副食とし、茶やジュースやミルク等を飲料とし、醸造酒を少しずつ嗜むといった生活をし、四季折々の農耕労働をしている社会や村落や家族であった。そこには、一般の食養指導者達が重きを置かない労働、有意義に体を使うことと、家庭や村落の伝統的安らぎがあった²⁰⁾。

これ等の秘境での長距離バスの開通、商品交換・市場経済の拡大、農薬や化学肥料の流入、外部からの加工食品の流入は、伝統的な食物や習慣を変化させ、自然環境を変化させ、短命化・生活習慣病の増加をもたらした。このようなことから有機農業から慣行的農業への移行が、短命化や生活習慣病の増加につながっていることがはっきりしてきた。石塚、二木、西、桜沢等の学説や近代医学を研究すると同時に、長寿村の実態も合わせて考え、独自の食養法を考案し、5・1・1 3食を提唱し、実践している。5は玄米に大豆、小豆、麦を1割混ぜたものあるいは、1～5分

搗き米に炒り玄米や大豆、小豆、麦を1割混ぜたもの、1は貝類や子魚、子えび、1は大豆、3は野菜や海藻、発酵食品少量の合計、もちろん、よく噛んで食べ、自然に感謝する。約10年前に、交通事故で骨折等の重傷を負ったが、70歳代の高齢でありながら見事に健康を回復し、現在80歳代半ばで元気であって自説の有効性を実証している。また、重症の患者さんが安藤の指導により健康を回復し、90歳台でありながら矍鑠としている人もいる。

(3) 最近の医学農学理論の吸収

食養法のみならず、最新の西洋医学の研究、九州大学医学部や農学部の新進気鋭の研究者からの最新の理論の吸収を行い、医療や啓蒙活動に応用し、その結果を大学や自分の理論の開発につないで行った。このような理論と実践との幅広いフィードバックの循環が、安藤の思想を豊かにして行った²¹⁾。

なかでも、安藤は遺伝子の機能を重視している。人は、自然環境の中で生育する植物中の稲、麦等の穀物を選択して栽培し、その果実を調理し、食物として摂取してきた。野菜や魚等は、調味料を加えて調理し、食物としてきた。そして、人はそれぞれ、特定の職業労働に従事してきた。その結果、環境に適合した人体が形成され、その中で生命の根源である遺伝子が形成され、遺伝子が歯や脳や腸等の器官形成を誘導してきた。安藤は、遺伝子が人体にとって異物の、化学合成物質である農薬や洗剤、さらには放射線によって傷つけられ、癌や奇形を形成することを憂慮している²²⁾。

母体の胎盤から胎児への有害な異物病原菌の流入防衛機能も、胎児や乳幼児のみならず成人においても脳の血液脳関門の有害な異物病原菌の流入防衛機能も不完全であることが明らかとなり、食物の摂取を通じての公害物質の流入に警告を出している²³⁾。

土壌中の微生物や腸内の細菌類の役割の解明の進展にも注目している²⁴⁾。

(4) 食物連鎖の重視

生体に有益なプランクトンのみならず、有害な異物や病原菌を小魚のような小動物が食べ、その小動物を中動物が食べ、中動物を大動物が食べ、最終的に食物連鎖の頂点にいる人間が食べて、その前段階の生物が分解出来なかった有害な異物が段々濃縮されて人体に蓄積されていく危険性を危惧している²⁵⁾。先に指摘した、陸地の近海や遠洋における魚類のダイオキシンの蓄積についての、水産庁の調査結果は人類への予測的警告として厳しく受け取る必要がある。地中や河川湖沼海洋大気等には、過去の有害物質が分解されないで残留している。これらの物質が、食物連鎖を通じて人体に及んでくる。

(5) 意思決定と責任

自然食の会や有機農業研究会は、政党、企業や宗教団体から経済的援助をうけない、経済的に独立し、理論面でも、活動面でも、独立した意思決定主体者で、意思決定とその結果としての活動の短期的のみならず長期的・歴史的予測と結果についての責任・評価の受容者であることを認識している。自然食の会や有機農業研究会は、自主的に意思決定し、活動してきている。目的を共にする団体とは、フォーマルにもインフォーマルにも協力してきている。

(6) 自然への感謝

我々の祖先は、太陽がその光線や熱によって植物の光合成を可能にしていることを、直感的に悟っていた。だから、太陽を神として尊崇し、朝早く日の出を拝んでいた。その姿は、農村ではよく見られたものである。太陽のみならず、山や木や川も神としてきた。自然環境が破壊されて、我々は環境の存在や機能に気づいている。水惑星としての地球は、金星と火星の中間の絶妙な位置にあって公転軌道を描いて太陽を回りを、自転しつつ公転して気温や水を維持している。植物の根に

よって保水し、葉によって空気を浄化し、気温を安定化させ、美しい景観を維持してきている。安藤は医師として、人の生死に直面させられることが多く、人の有限性や無常さを知り、永遠なるものへの帰依の心が強いように感じられる。

第2節 健康長寿と自然環境および市場経済との関連についての研究の拡大の必要—今後の課題—

健康長寿になれば、人口が多産少死や多産老衰死型構造となり、人口が増加傾向をとり、増加人口の就業や農地の増加が必要になる。フンザやゆずり原村が就業や就農の問題を歴史的にどのように解決して来たのか、遺産相続がどのようになされたのか、市場経済の波及がどのように農業や健康に影響を及ぼして来ているのかの実証的調査研究が為される必要がある²⁶⁾。このような研究がネパールについては、九州大学・久留米大学・中村学園大学・福岡工業大学の健康科学グループが現地調査を長期間に亘って行っている。その成果の一つに、緒方道彦編、ネパールにおける高血圧発症要因の比較疫学的研究、九州大学健康科学センター、1989がある。健康科学グループの現地調査研究報告で、住民の人々の自然食（粗食）、重労働および驚嘆すべき体力等への言及に、私は深い感銘を受けた。

第3節 安藤の活動—今後の課題

安藤が会長である自然食の会や福岡県有機農業研究会の実践面は本誌の後続号で発表したい。

第4節 梁瀬義亮（1920～1993）と竹熊宣孝（1934～）の思想

安藤孫衛、梁瀬義亮、竹熊宣孝は、多くの共通面を持っている。三人とも医者で有機農業を重視し、実践した。志は高遠であったが、行動はそれぞれ福岡、五条、熊本と地方に根

をおろし、地方に溶け込んでいた。空理空論に陥らず、政治権力や企業等に距離をおき、大地から離れず質実な行動をした。大気や土壌や水を汚染せぬ有機農業を尊重し、生命力に満ちて美味の有機農産物を愛好し、精白しない穀物を主食とし、副食は野菜、大豆類および海草を中心とし、それに適当に魚、卵、乳製品を添え、肉は少ないほうがよいとし²⁷⁾、調理技術を研究し、よく噛み、自然に感謝することを人に推奨した。現代医学を研究するとともに生態の循環を研究する生態学を研究した。

第4章 むすび

経済の高度成長、機械装置の発達、高度大衆消費社会Society of High Mass Consumptionをもたらした。企業活動は、大量購買、大量生産、大量輸送、大量販売となり、消費者は所得増による大量購買、大量消費、大量廃棄をし、使い捨て社会が来たと思わされた。しかし裏面では、ごみ処理ゴミ捨て場問題、ダイオキシン問題、大気汚染問題、土壌汚染問題、水汚染問題、森林減少問題、生活習慣病問題、高齢者介護問題、資源エネルギー問題等が忍び寄っていた。これ等の問題はいろいろな分野から調査研究され、解決に努力されている。問題が生じてから、解決策を検討するのでは、遅すぎる。事象の進行を科学の因果法則により予測、予見し、結果を未然に予測して、準備し、予防することが予期され、望まれる。

農業においても、農薬、除草剤、化学合成肥料には、農場に河川を通じて流入してくる化学合成洗剤とともに問題があるから、減農薬、減合成化学肥料を越えて、有機農法が期待されている。さらに、農場に流入する河川の浄化が必要になって来ている。

最近では、有機農業の認証制度が、軌道に乗りつつある。

国民の健康を推進し、病気を診断、治療し、

さらに予防を考える医者の中で、有機農業の重要性を見抜き、有機農業を先導し、誘導している先導者の思想の流れを九州中心に研究した。

注

- 1) 文献3, 参照。
- 2) 文献4, 参照。
- 3) 文献23, 101ページ。
- 4) 文献3と文献4とは、共に第1章の章題は、人類は穀食動物である、となっている。
- 5) 文献4, 46ページ, 51-52ページ。
- 6) 文献3, 39-52ページ。
- 7) 文献3, 174-5ページ。文献4, 131-2ページ。
- 8) 文献4, 80ページ。
- 9) 文献4, 182-3ページ。
- 10) 文献3, 6-8。文献4, 5-7ページ。文献6, 34-37。文献18, 218-222ページ。
- 11) 文献6, 37-49。文献18, 220-222ページ。文献14, 59-61ページ。
- 12) 文献3, 44, 325, 359, 378, 433ページ。
- 13) 文献3, 182-3ページ。
- 14) 文献31, 185-7ページ。
- 15) 文献31, 187-9ページ。
- 16) 文献31, 196-200ページ。文献20, 76ページ, 95ページ, 文献22, 57-63ページ。
- 17) 文献31, 167-8, 211-2, 214-5ページ。文献17参照。
- 18) 文献2, 55-72参照。
- 19) 文献2, 35-40。安藤の影響により有機農業を実践した人は多く、その中で水野和彦も熱心な実行者である。
- 20) 文献1, 118-133。文献2, 15-31。文献38, 118ページ。文献39, 42ページ。
- 21) 文献1, 178-191ページ。
- 22) 文献1, 95-115ページ。文献2, 98-107ページ, 121-132ページ。
- 23) 文献1, 33-53ページ。文献2, 80-1。
- 24) 文献2, 156-7, 178-9, 185-6ページ。
- 25) 文献2, 122-128ページ。
- 26) 文献35参照。
- 27) 文献38, 87, 90ページ。文献39, 36-40ページ。

文献

文献は、著者の姓の頭文字をあいうえお順にして、番号をつけた。注で引用する文献は、この番号のみ

で示す。

- 1) 安藤孫衛, 食品公害から生命をまもる, ダイヤモンド, 1976。
- 2) 〃, いのちを守る健康食, 西日本新聞社, 1989。
- 3) 石塚左玄, 化学的食養長寿論, 博文館, 1897。
- 4) 〃, 食物養生法, (複刻版) 日本CI, 1974。
- 5) 〃, 上書訳, 橋本政憲訳, 丸山博解題, 自然食養の原典, 食物養生法, 農文協, 1982。
- 6) 井尻正二, 小寺晴人, 新人体の矛盾, 築地書館, 1994。
- 7) 河内俊英, 環境問題と水汚染, 久留米大学産業経済研究会, 産業経済研究, 第35巻第4号, 1995, 3。
- 8) 河内俊英, 日本の廃棄物処理の現状と課題, 同会, 同誌, 第40巻第3号, 1999, 1。
- 9) 岸根卓郎, 宇宙の意思, 東洋経済新報社, 1993。
- 10) 〃, 人類究極の選択, 〃, 1995。
- 11) 〃, 文明の大逆転, 〃, 2002。
- 12) 久司御知夫, マクロビオティック健康法, 1979。
- 13) Michio and Aveline Kushi, Macrobiotic Pregnancy and Care of the Newborn, Japan Publications Inc.
- 14) 久司道夫, 久司偕代, マクロビオティック食事法(上), 日貿出版社, 1989。
- 15) 〃, 〃, 〃(下), 〃, 1990。
- 16) 久司道夫, マクロビオティック入門, かんき出版, 1997。
- 17) 久司道夫, 地球と人類を救うマクロビオティック, 文芸社, 1998。
- 18) 久司道夫, マクロビオティック自然療法, (大嶋道子訳), 日貿出版社, 1999。
- 19) 厚生労働省, 平成14年版厚生労働白書, ぎょうせい, 2002。
- 20) 桜沢如一, 無双原理 易 実用弁証法, 日本CI, 1969。
- 21) 〃, 宇宙の秩序, 一自然・人間・精神・社会を貫く法則, 〃, 1973。
- 22) 〃, 新食養療法, 〃, 1985。
- 23) 〃, 石塚左玄, 大空社, 1994。
- 24) 祖田修, 農学原論, 岩波, 2000
- 25) 竹熊宣孝, 米とかあちゃん, 家の光協会, 1991。
- 26) 〃, 歎と聴診器, 地湧社, 1999。
- 27) 〃, 田舎一揆, 〃, 2000。
- 28) 〃, 土からの教育, 〃, 2000。
- 29) 〃, 土からの医療, 〃, 2001。
- 30) 〃, 聞書, 安部周二, いのち一番, 西日本新聞社, 2000。
- 31) 田邊信太郎, 島菌進, 弓山達也, 癒しを生きる人々, 専修大学出版部, 1999。
- 32) 十島雍蔵, 心理サイバネティクス, ナカニシヤ, 1989。
- 33) 西丸震哉, 体内崩壊, 法研, 2000。
- 34) 沼田勇, 幕末名医の食養学—いま甦る石塚左玄の粗食健康法, 光文社。
- 35) 農文協文化部, 短命化が始まった, 農山漁村文化協会, 1986。
- 36) 荷見武敬, 有機農業に賭ける, 日本経済評論社, 1991。
- 37) 南日本新聞社編, 有機農産物再発見, 家の光協会, 1998。
- 38) 梁瀬義亮, 有機農業革命, ダイヤモンド社, 1975。
- 39) 〃, 生命の医と生命の農を求めて, 〃, 2002。

あとがき

本誌のような学術誌の一般的な慣例により、本文中の氏名の前後の敬称を省略させて戴いた。改めて、貴重な著書論文、講演、ご厚誼を通じて優れた情報を戴いたことに敬意と謝辞を記しておきたい。また調査研究にあたって貴重な資料を下さった方々に感謝申し上げたい。

農林経済学者の岸根卓郎氏は、文明化社会では、800年周期で東洋文明と西洋文明とが交代して来ており、21世紀からは情意面が優位にある東洋文明が論理的思考に優れている西洋文明に交代して世界を先導していき、環境を維持保全する文明を築いて行き、農業面では有機農業が優位していくと予測され、誘導される大著を発表されている。特に日本人には左脳の機能の論理的思考と右脳の機能の情意的思考とが連絡均衡しており、次の800年を先導していこうと述べられている。その根拠・典拠も本文や注で示している。久司道夫氏と似たような壮大な理論体系を発表されている。文献9, 10, 11および同氏の、文明論・増補版, 東洋経済新報社, 1996を参照されたい。